

# *The Mortal Immortal* における生と死のダブルバインド

## Mary Shelley の短編小説を読み直す

野間 由梨花

### はじめに

Mary Shelley の短編小説のいくつかは *The Keepsake* に掲載されており、*The Mortal Immortal* もそのうちの一つである。彼女は P.B. シェリーやバイロン卿といったロマン主義時代を代表する詩人や思想家とともに生きており、作品にはロマン主義的モチーフが見られる。しかし、彼女はそうしたロマン派やロマン主義的な表現を取り入れながらも、新たな自己表現の形を模索していたのではないかと考えた。本発表は、短編小説 *The Mortal Immortal* (1833) において、シェリーがロマン主義的モチーフを作中にどのように表現しているのかを、「若さ」や「美しさ」をキーワードに考察する。このキーワードを世紀末文学において大きく展開するモチーフであると考え、世紀末的モチーフが大きく展開されている Oscar Wilde の *The Picture of Dorian Gray* (1891) を用いて、本短編内でどのような意味を持つのかを比較検証した。作中に表現される「若さ」や「美しさ」の概念を考察することで、シェリー作品においてそれらがどのような意味を持つのかを明らかにし、さらに作品が持つ意味を考察していく。

### *The Mortal Immortal* における「若さ」と「生きること」そして「死ぬこと」

語り手であるウィンジーは、「恋の病」から立ち直るため、薬を飲み、不死身の体を手に入れてしまう。彼は意中の相手バーサとの恋を实らせるが、異変に気づき始める。バーサは時が経つごとに老いていく一方で、ウィンジーは若いまま、老いることなく一人取り残されてしまう。物語冒頭で、ウィンジーは“The Wandering Jew” (MI 295) について言及する。「さまよえるユダヤ人」は、聖書に出てくる伝説上の人物で、磔に向かうキリストを罵倒し、再臨まで彷徨い続けるだろうと言われたユダヤ人のことだ。これはロマン主義時代に流行ったモチーフの一つで、P.B. シェリーが *The Wandering Jew's Soliloquy* (1810) を、ワーズワースが *Song for the Wandering Jew* (1815) を残していることからわかる。このモチーフを用いて書かれた作品の共通点は、永遠に死を迎えることのない男が彷徨、叶わぬ休息を求めることだ。ウィンジーの323年間生きてきたという証言から、このモチーフが登場人物造形および物語構成のベースであることがわかる。しかしウィンジーは、「さまよえるユダヤ人」と比べれば“a very young Immortal” (MI 295) であると主張する。ロマン主義時代に流行したモチーフを単に投影させただけでなく、「若さ」というエッセンスを加えたことは注目に値する。

また、ウィンジーによって語られる、アグリッパとその弟子の一人に関するエピソードは、Robert Southey の *Cornelius Agrippa; A Ballad, of a Young Man that would Read Unlawful Books, and how he was Punished* (1798) から着想を得ていることも興味深い。アグリッパもまた、ロマン主義時代によく取り上げられた。同時代によく議論されていた「自然を操ろうとすることは不自然なことだ」というアイデアを登場人物に意識させているのだろう。それでは、本短編小説での「若さ」とは何か。若さを保ったままであるウィンジーは明らかに自然の流れとは逆行した「不自然な存在」だ。ウィンジーは彼の物語を、“I was then very young – very poor – and very much in love” (MI 295) と始める。ここでウィンジーが言う「若さ」は、つまり「生」を意識していると考えた。恋も仕事もうまくいかないという嘆きが、彼を無意識に「悪魔」と契約するきっかけになってしまった。この時点で「若さ」は、未熟さや不確かさの要素が多い。同様のケースがワイルドの『ドリアン』にも読み取ることができると考えた。

### *The Picture of Dorian Gray* における「若さ」と「美しさ」

次に『ドリアン』の中で描かれる「若さ」や「美しさ」はどのような意味を含んでいるのかを考察する。ドリアンを変えたヘンリー卿の唱える「若さ」とはどのようなものか。ヘンリー卿の“When your youth goes, your beauty will go with it, and then you will suddenly discover that there are no triumphs that the memory of your past will make more bitter than defeats.” (PDG 22) という発言から、「若さ」は「美しさ」に直結していることがわかる。ドリアンが悪魔と契約す

ることになったのは、ヘンリー卿に感化されたことによる「美しいまま」でありたいという気持ちからだ。重要なのは性質であって見た目ではないと信じていたドリアンの思想が大きく変化したことが明らかだ。ドリアンが求めた「美しさ」は「若くあること」を意味し、「若さ」とはつまり「生きること」の象徴であると考えた。「若さ」および「美しさ」をキーワードに考察を進めたことで、ワイルドの思想に流れる唯美主義的考え方にたどり着いた。

### エンディングが示す作品が持つ意味の考察

最後に *The Mortal Immortal* のエンディングが持つ意味を考察する。ウィンジーが薬を飲んだのは、バーサが心変わりしてしまうことに不安を感じた事による。彼は“[i]t will cure me of love – of torture!” (MI 298)と、その不安が払拭されることを願い、薬を飲む。アグリッパの死の直前、ウィンジーはその薬が「不死身の体を得る薬」だったことを知る。アグリッパの“A cure for love and for all things – the Elixir of Immortality. Ah! if now I might drink, I should live for ever!” (MI 302)という嘆きからは、「若さ」を手に入れることは「生きること」であると読める。バーサの死後、ウィンジーに残ったのは、生きている自分と膨大に残された時間だった。彼が「若さ」とともに手にしたのは「喪失感」や「虚無感」で、死ぬこともできず、彷徨い続け、休息を求めようとするその姿は、「さまよえるユダヤ人」と重なる。

ウィンジーは常に、「生」と「死」の中で揺れ動き、明確な結論を出すことはしない。しかし、彼の「生きたい」、「生きなければ」という気持ちは常に彼の中で先行し、不自然な生を受け入れ、葛藤しながら、生きることと死ぬことについて次のように述べる。

Sometimes I fancy age advancing upon me. One gray hair I have found. Fool! Do I lament? Yes, the fear of age and death often creeps coldly into my heart; and the more I live, the more I dread death, even while I abhor life. Such an enigma is man--born to perish--when he wars, as I do, against the established laws of his nature. (MI 306)

メアリー・シェリー自身が夫シェリーの死後、それをより強く意識したのと同様にウィンジーは、バーサの死を目の当たりにしたことから、死を意識し始める。ウィンジーの感じる生と死のダブルバインドは、私たち人間が挑戦し続ける永遠のテーマであり、メアリー・シェリーにとっても最大の課題だったのであろう。

### おわりに

今回の検証を再度振り返り、このテキストを見てみると、メアリー・シェリーは単にロマン主義的モチーフを受容して、作中に表現していたわけではなく、新しい要素を加えることによって、彼女自身の内面を色濃く映し出すことに挑戦するような独自の特質が指摘できる。この新たな要素を用いた個人の内面の表現こそが、シェリー文学の固有性であると言えるだろう。これまでも自叙伝的要素が見られると指摘されてきたシェリー作品だが、作中に表現される悲しみや孤独感は、確かに彼女「個人の率直な内面の表現」でありながら、この短編の主人公のように「若さ」といった新たなエッセンスを加えることによって、彼女自身が生きることの苦悩しながらも、自分自身を奮い立たせながら生きることの表現したのだと考えられる。これは、シェリー文学が持つ、これまで見逃されてきた特質だろう。シェリーは書くことで、生きすることを体現しているのだ。

### 引用・参考文献

Shelley, Mary. *Frankenstein; or, The Modern Prometheus*. Edited by J. Paul Hunter, ---. “The Mortal Immortal”, *Mathilda & Other Stories*. *Wordsworth Classics*, 2013.

Southey, Robert. *Cornelius Agrippa; A Ballad, of a Young Man that would Read unlawful Books, and how he was Punished*. *Romantic Circles Electronic Editions*, <https://romantic-circles.org/editions/mws/immortal/cornelius.html>. Accessed 20 September 2021.

Wilde, Oscar. *The Picture of Dorian Gray*. 1891. Oxford UP, 1981.